
絶対に『 』と言わせてやるッ！！

篠原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対に『 』と言わせてやるッ！！

【Nコード】

N3691E

【作者名】

篠原

【あらすじ】

とある学校には漫画にでてくるような優等生がいた。その優等生に、同じ学校の男子生徒はある決意を抱く。が、はたしてそれはうまく達成できるのか・・・

ある日の夕暮れ。

「ちつくしょーッ！！あのロボットめッ！」

「あつはつはつは！！！！お前また惨敗したのかよ！」

「笑い事じゃねえつつうの！！！」

人気のない公園で二人の男子高校生の話し声が響く。

「たつくよー！アイツ嫌いなこととか苦手なこととかねえのかよ！！」

「だよなー。頭脳明晰、運動能力抜群、性格も温厚で揉め事一切なし。例外なく先生のお気に入りで親もごくごく平凡な一般家庭」

「いまだきマンガでもねえぞんな設定」

「ホント、アイツに弱みってないのかね？」

「ねえだろ。ロボットなんだからよ」

「それもそうか」

そう片方が言った瞬間、二人共一気に爆笑し始める。

しばらくして二人の笑いがちょうど収まりかけた頃、一つの影が二人に重なるように伸びてきた。

そして・・・

「強いて言うなら、細菌には弱いですかねー・・・一応ロボットって言われてても人間ですから」

「ッ！！！！！！？」

目の前の二人の肩にポンと手を置くとにつこりとほほ笑んだ。

二人は冷や汗を流しながら後ろをそつと見てみるとそこには、先ほどの話に出ていた

「よ、よお瀬野・・・」

「早いな・・・部活は？」

「先生に急な会議が入ったので途中で切り上げてることにしたんです。まあ、そのおかげでとても興味深い話が聞けたんですけど、ね」

そういつて瀬野と呼ばれた男子学生はおどけた様に笑う。が、

「（目が！目が笑ってないよ瀬野！！）」

「（こいつ、マジで男子高校生か？実は魔王だろ・・・）」

見る側としては地獄の底から這い上がってきたような鬼の顔に見えた。

そして、当の鬼面は

「で？お話の続きしないんですか？ああ、別に俺のことは気にしなくてもいいですよ？」

につこり笑い、続きを促す。

二人の男子学生は、冷や汗を凄くかきながら沈黙がつづいたが、しばらくして最初悔しがっていた方の男子学生が思い立ったように勢いよく立ちあがると

「瀬野！！！」

「なんです？」

瀬野に向って指をさしながら、

「お前ッ！！今に見てやがれ！！いつか、いつかぜってえ」

「絶対・・・、なんです？」

「絶対ギャフンって言わせてやるッ！！！！」

大声で宣言するが、そう男子学生が言い終わった直後数秒も間を空けず

「ぎゃふん」

「・・・・」

「あれ？もう一度言っただけだったですか？」

そういつて瀬野は首をかしげて見せた。

その様子をみた片割れが、勇気を出して恐る恐る声をかける。

「あの・・・瀬野、さん？」

「なんですか？」

「今、ぎゃふんって・・・」

「ああ、言っただけだったんでしょう？」

「いや、そーいう意味でいったんじゃあ・・・」

「違うんですか？」

そう瀬野が言った瞬間。

その場に再び沈黙が流れる。

再び訪れる沈黙を最初に破ったのはあるることか、瀬野の方だった。
瀬野は、手をぽんと打つと、

「じゃあ、こうしましょう。明日ある体育の50M走、確か俺と貴方一緒に走りましたよね？」

「あ、ああ。そうだったな・・・」

「その時に『ぎゃふん』と言った方がなんだかムードがでますので・
・では、その時に言いましょう。・おっと、俺は少々予定を思
い出したのでまた明日・・・」

そう言うや否や、瀬野は呆然と立ち尽くす男子二名に『失礼します』
と律儀に別れを告げると、元来た道をそそくさと帰って行った。

そして、その場に取り残された二人の男子学生はその姿をただ呆然
と見送るしかなかった。

後日談――

3 限目体育

「よいい・・・ドンッ！！！」

その合図のあと、二人の男子が凄いスピードで走り抜ける。
そして、最初にゴールに着いたのは・・・

「ごーる！瀬野君、おつかれ～。えっと、タイムは・・・すつごー
い！！7秒05！早いね瀬野君！」

「さっすが瀬野君！！かっこいい」

「いえいえ。そんなことはないですよ・・・っと、少し失礼します」

見事瀬野のほうで、タイムを計っていた女子やほかの遠くでそれを見
ていた女子からも黄色い声が聞こえる。

それを丁寧にあしらい瀬野はその会話から脱出すると、向こう側で

落ち込んでいる男子の方へ駆け寄ると

「いや、なかなか素晴らしいスピードでしたね。さすがですよ。私も今回はお手上げです」

「・・・」

「ええ、まいりました。ぎゃふん」

昨日約束下通りの言葉を述べる。しかし、というよりやはり、

「・・・俺は、」

「？」

「俺はそんな明らかにお世辞まるだしの負け台詞いらねええええええッッ！！！！！！！！！！」

その男子は、負けた状態にも関わらず言われたことに腹をたて瀬野を怒鳴る姿が目撃された。

ちなみに、その騒動は

「いやあ、貴方をからかうのって楽しいですね。つついちゃっかいをだしてしまいますよ」

全て瀬野の計算通りだったりする。

表面は成績優秀、運動神経抜群の優等生

しかし、素顔は・・・

腹黒魔王だったりもする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3691e/>

絶対に『 』と言わせてやるッ！！

2010年10月26日14時26分発行